

現代青年と成熟

～ アイデンティティとモラトリアム論の視点から ～

奥田 紗史美

(人間科学研究科専任講師)

1. はじめに

現在の「青年」や「若者」は、どのような状況に生き、またどのようなイメージで捉えられているのだろうか。終身雇用制度の崩壊、少子高齢化にともなう社会保障制度の見直しなど、現代の青年を取り巻く状況は混沌としている。若年層の高い失業率は、近い将来の国の弱体化を憂う声となり、特に若者の職業訓練や人材育成をどのように行うかは活発に議論されている。また、フリーターやニート、ひきこもりといった言葉は、すでに本来の意味を離れて独り歩きし、青年のイメージに影響を与えている。そこでは、働く気がある失業者も、そうでない者も、労働以前の根深い問題を抱える者も混同され、「やる気のない若者」「未熟な若者」としての烙印が押される傾向がある。結果、労働需要側に存在する問題や、ひきこもりを産む社会病理の問題などがそれぞれ矮小化されるという弊害も指摘されている(たとえば本田, 2006など)。そのほかにも、青年をめぐる言説は多々あるが、特にイメージ先行型の「今どきの若者は〇〇である」という、いわゆる「俗流若者論」(後藤, 2006)は絶えることがない。それらは総じて若者の未熟さや甘えを嘆くものであることが多い。たとえば武部元自民党幹事長の「サマワ発言」¹⁾のように、成熟を促すためにはどうすればよいかという自論が政治家の口から語られ、議論を呼ぶこともある。

改めてライフサイクルの観点から考えてみると、成熟とは本来、あらゆる発達段階において存在する、重要な問題のはずである。しかし青年の場合特に、その「未熟」さが問題とされやすいとは言えそうである。おそらく乳幼児期・児童期は身体的にも未熟なことが明白なため、放免されているという側面があるのだろう。しかし、いずれにせよ青年期が発達段階のなかで比較的早期の段階にあたるのは自

明のことであり、それ以降の発達段階と比べてしまえば、社会的にも心理的にも未熟であるのは当然といえば当然である。また、青年ではなくなった成人を、仮に「大人」と総称するとして、青年と大人の区分は一体どこにあるのだろうか。つまり、青年が「大人」になるためのゴールや成熟の指標というのは、明確なものとして存在するのだろうか。これほどまでに「成熟」が期待される青年は、いったいどこにどう向かえばよいのだろうか。つまり、成熟とはそもそも何かという問題が浮かび上がる。

本論では、青年期という一つの発達段階において特に「成熟/未熟」が問題とされるのはなぜか、また、成熟の持つ社会的側面について整理する。その上で、青年期発達の重要なキーワードである、Eriksonのアイデンティティとモラトリアム論を再考し、包括的な成熟のありようと、青年期という発達段階がもつ、ライフサイクルにおける本質的な意味を問い直す。

2. 青年期のはじまり

広辞苑では、青年期とは“子どもと大人の間にある位置する段階で、思春期から20代半ばまでの時期”と定義されている。また、新明解国語辞典では、青年を、“20歳から30歳後半までの人を指す”としている。その他の辞書においても、概ね思春期～30歳程度までが「青年」の範疇に入っており、その上で、定義として心理発達の課題に言及しているものも、そうでないものも認められる。いずれにせよ、日本語で通常「青年」と言う場合、その年齢は、思春期から30歳前後までの、20代を中心とした時期を指すことが多い。

溝上(2010)によると、青年期(adolescence)はいわゆる若者(youth)よりも学歴エリートイメージを伴う概念であるという。さらに、その概念を誕生の歴史から遡ると、①工業化(産業革命)を

経た近代社会で誕生した社会歴史的概念であること、②子どもや若者が労働や生産の場から解放されること、③学校教育を通して子どもから大人になるまでの年齢期であること、④思春期を迎えるころから大人になるまでの年齢期であること、の4つが基本的な条件としてあげられるという。前近代では若者は労働から解放されておらず、親の職業や身分によって決まる職業に早くから従事していた。しかし、工業化によって社会全体の生産力が増加したため、若者が生産に従事しなくてもすむようになった。加えて国家が近代化する過程で、18世紀から19世紀に教育自体が近代化した。近代は特権階級が支配する社会から一歩前進したメリトクラシー（業績主義）社会であり、若者は、労働ではなく学校を通しては職業選択をし、人生を形成するようになった。これがいわゆる青年期の始まりである。メリトクラシーは、それまでの身分や家柄とは異なり、子どもの能力によって社会選抜を行う（つまり能力のあるものほど高い階層に行ける）という側面を持っており、学校は選抜のための装置として機能する。

以上のことから、青年期は、「若者」の単なる別称ではなく、固定した身分制度から、学校教育のなかで自ら人生選択を行う社会システムへの移行に伴って誕生した発達段階であることが分かる。青年期は学校教育と切り離して考えることはできず、さらには元来から「選択する時期」を示しているともいえるだろう。このように見ると、昨今の高学歴化に伴い、青年期が延長していくのは当然のことであると思われる。青年期が延長すれば、子ども（あるいは若者）と大人（職業人）の間の断絶は深くなる。そのことによって、「大人」は、ますます青年を捉えどころのない存在とみなすようになる可能性もある。

3. 青年期の大衆化と現在

メリトクラシー社会の発達や青年期の一般化には、国や文化によって大きな違いがある。日本の場合、明治時代に学制が発足したものの、戦前の高等教育はある程度経済的に恵まれた一部の人のものであった。高等教育が大衆化するのには、第二次世界大戦後、特に1960年代以降である。

文部科学省が発表している学校基本調査の統計資

料によると、高等学校への進学率は1961年に男女とも60%を越え、以来上昇を続け、70年代半ばには90%を越えている。現在でも100%には届かないものの、ほぼすべての者が中学卒業後は、高等専門学校などを含めた、なんらかの高等学校に進学している。大学進学率は、60年代半ばごろまで男子で10%強、女子で2.5%程度であったが、64年には男子で25%、女子も5%を越え、以降は特に男子で順調に増えている。女子の場合も徐々に増えていたが、特に2000年以降、短期大学への進学率が低下する一方で、大学に進学する者が増加している。2009年には男女合わせた全体で50%を突破し、短期大学も含めた進学率は60%に届く勢いである（文部科学省、2012）。

上記の資料で、高等教育が一般的になっていったと思われる1960年代は、戦後の第一次ベビーブーム世代である団塊の世代（1947～49年生まれ）が高等学校、大学へ進学した時期である。つまりこの世代は、日本の若者の間で「青年期」が大衆化した最初の世代であると考えられる。この世代の「青年期」として一般的に思い浮かびやすいのは「学生運動」や「全共闘」といった、良くも悪くも猛々しいイメージであるが、その一方で、1964年の大阪大学の大量留年をきっかけに、意欲減退型の留年などの存在が問題とされる（溝上、2010）など、対照的な側面も持ち合わせていた。それを受けて、1966年には東京大、京都大、島根大、長崎大に保健管理センターが設置された。

青年をめぐるのは、その後も「しらけ世代」、「三無主義」、「新人類」など、何らかのかたちでラベリングが行われ、時代とともにラベルは消えるという動きが繰り返されている。現在の「ニート」「ひきこもり」の使われ方もこれに近いものがある。これらのことから、青年に対する「無気力」「弱い」というようなネガティブで未熟なイメージが、基本的には時代を越えて存在していることが分かる。そのイメージだけを問題にすれば、程度の差はあれ、日本の若者はもうすでに40年近く未熟で無気力ということになる。つまり、青年の未熟さへの指摘は、ある時代にはみられ、ある時代にはないというようなものではなく、ある程度普遍的なものであると言える。「青年」とは、その大衆化以降、いつの時代

でも未熟や甘え、やる気のなさというイメージで捉えられることを宿命づけられた存在なのである。そこで、この問題を理解するために、「未熟さ」を社会の側がどのように問題視しているのかを以下に整理する。

4. 社会からみた「成熟」

浅野(2006)は、若者批判を二つのタイプに分類している。ひとつは経済的な視点からの批判である。日本の経済をマクロな水準で捉えた場合、パラサイト・シングルやニート、フリーターが増加している若者は、その貢献度がマイナスであるとみなすタイプの批判である。もうひとつは道徳的な視点からのもので、あるべき人間像、道徳観に依拠する批判である。ここでは、特定の道徳や規範に違反しているかどうかが問題となる。例えばある種のマナー違反やキレやすい子どもといったイメージである。また、浅野(2006)によると、この二つは論理的には異なるものであるがしばしば重なり合った形で提示されるという。例えば、フリーターやニートは経済的な損失になるだけでなく、その姿が人としてあるべき姿(たとえば、勤労に勤しむなど)から逸脱しているという道徳的な観点からも批判される。

さらに、これらの批判は、若者あるいは青年が道徳的に未熟である故に、日本経済に深刻な問題を引き起こすという因果の関係にある。この因果関係の視点で考える者にとっては、若者をめぐる問題が、最終的にその「道徳的」な未熟さ、つまり個人の資質の問題に帰結するのは当然であろう。

また、この因果関係の枠組みでは、青年の未熟さが個人的問題にとどまらず、マクロな次元にまで影響が波及すると考えられていることも重要である。例えば平成19年度版厚生労働白書(2008)には若年層への就労支援に関して「フリーター・ニート等若者の人間力の強化の推進」という章が設けられている。その対策にはジョブカフェやトライアル雇用事業と並んで、集団生活の中で「働くことへの自信と意欲を付与」する若者自立塾事業、職業意識を高めるためのキャリア教育、さらに「若者の人間力を高めるための国民運動の推進」などが含まれる。この人間力とは「社会の中で人と交流、協力し、自立した一人の人間として力強く生きるための総合的な

力」(若者の人間力を高めるための国民宣言, 2005)と定義され、かなりあいまいであるが、宣言の内容からみると、概ね「コミュニケーション能力」や「意欲」などがその射程に入っているようである²⁾。

いずれにせよ、ここではその対策や枠組みの意義や有効性ではなく、就労支援が「人間力」なるものの強化とイコールで結ばれた図式そのものに注目したい。ここでは若者の人間力と言う個人の力が就労に結びつき、さらにそれぞれの就労が日本経済の発展に関わるという因果関係が想定されている。あらゆる意味で就労できる力を個人が身に付けたかどうかと言う点から成熟を捉えれば、青年の未熟さは国家の存亡に直結する問題である。ゆえに社会は青年の未熟さに厳しい目を向ける。就労だけでなく、次世代の労働力となりうる子を産み育てる、結婚や出産も同様の側面をもつ。今後、経済発展そのものが目指す価値としての機能を失おうとも、家族の形態が多様化しようとも、人間が社会を構成する限り、社会に貢献できる能力と資質を持つという側面から成熟が問題にされることはなくなるだろう。むしろ、その時々で社会が期待するものを察知し、提供できる個人であるかどうか、つねに問われることになる。価値観が多様になればなるほど、求められる資質もより複雑になり、その意味で成熟はより困難になってくるのではないだろうか。

以上は社会の側から見た成熟のありようである。ここでは成熟は、主に同時代における社会との関係の結び方、あるいはその能力という形で捉えられる。社会への貢献度と言いかえることも可能だろう。社会的成熟では、就職や結婚のような具体的「成果」がイメージされやすく、良くも悪くも成熟の指標としては分かりやすい。心理臨床の場面でも、青年期に限らず「働けるように」「学校に行けるように」という社会適応が最初の主訴として提示されることは多く、その意味で、目標となりやすいといえるだろう。

5. 個人にとっての「成熟」

さて、先述のように、青年期は、個人のライフサイクルの中では比較的若い時代にあたる一段階であり、そもそも「未熟さ」は、時代でも社会との関係でもなく、青年期という発達段階自体の本質を反映

している。その意味で、繰り返される未熟さへの指摘は、青年期の本質的な未熟さに社会が繰り返し反応しているという視点から理解することも可能である。もちろん時代によってその未熟さが変質しているという議論はありうるが、ここでは「青年期」のもつ普遍的な特徴と成熟について考えていきたい。

人間を包括的にとらえようとした場合、当然のように、社会的成熟は個人の成熟の一側面にすぎない。大人になることは、社会人になることがその全てではないのと同じことである。成熟には身体的な側面も、また人格や心理的側面の成熟もあり、それらは互いに連関している。青年期の初期にあたる思春期は、第二性徴という身体的成熟がその契機になるが、心理的にもその影響を受けながら変質していく。もちろん社会的な成熟が心理的成熟を促すことはありうるし、そのまた逆もある。

しかし、社会的成熟や身体的成熟とは異なり、心理的に成熟することが具体的にどういう状態かとイメージすると、その内容は個人によって千差万別であろう。社会的成熟との関連からは、それを可能にする個人の力を、そのまま心理的成熟と考えることもできる。だが、対人関係一つをとっても、社会的には自己主張的であるのがよいのか、控え目で思慮深いのがよいのかすら、一概に言うことはできない。そこには必ず個人の価値観や世界観が干渉するため、心理的な成熟や人格のあるべき姿を一つにまとめようとする、無理が生じる。むしろ成熟の問題は「未熟」という状態としてしか見えにくいとも言える。

6. 青年期とアイデンティティ

それでは、心理学的には、青年期はどのような時期と考えられているのだろうか。青年期 adolescence は、ラテン語で「成長する」という意味の *adolescere* をその語源とする。また、前述のように、青年期は学校教育による人生選択システムの発展とともに生まれた概念であり、本来「選択する」時期である。これらのことから、青年期が、そもそも成長の途上にある時期、つまり思春期に始まる大人への移行プロセスそのものを指すということが読み取れる。理論的にも、Hollingsworth (1928) の「心理的離乳」、Blos (1967) の「第二の

個体化過程」などに代表されるように、青年期では親への依存から脱却し、心理的な自立を果たす「過程」が重視される。青年は社会的にも心理的にも親に依存した状況から脱し、親から与えられた超自我を再吟味し、自我を形成する時期である。つまり、自らの足で歩んでいくための準備期間であり、その達成が青年期の終結であると考えられる。

これらのことを、最も包括的に示したものが、Erikson のアイデンティティの概念である。Erikson (1963) は、人間の人生を 8 つの発達段階に分けそれぞれの段階における主題を心理・社会的危機 (crisis) の形で提示した。それを図式化したのが「個体発達分化の図式 (epigenetic schema)」である。Erikson の理論は、ライフサイクル論とも言われるように、乳児期から老年期までのあらゆるライフステージを視野に入れ、人間の人生を包括的にとらえようとしているところに特徴がある。また、その包括性は、人間の生をライフサイクルの視点で捉えたことだけではない。Erikson 以前の発達論で代表的なものは Freud (1905) の心理・性的発達論である。そこでは、人のより生物学的な衝動である「性」を中心に理論が展開されていた。対して Erikson の発達論は、Freud のそれを土台としながらも、「心理・社会的」発達と銘打つ通り、家族を代表とする環境と個人の相互性を重視した。そして、人間の発達を心理、社会、身体の側面から包括的にとらえようとした。

青年期は、Erikson (1963) で示された 8 つの段階うちの 5 つ目にあたる。青年期における危機とは、「アイデンティティ達成対拡散」である。青年期は乳児期から児童期までの間に積み重ねてきた、父母や理想的な人たちへの同一化 (identification) から、それらを再吟味し、「私とは何者か」という独自の同一性 (identity) へと至る段階とされる。Erikson (1959) は同一性とは同一化の総和ではないということを強調しているが、青年の場合、子ども時代の同一化をそのまま積み重ねただけではパーソナリティとして機能しない。それらを選択したり拒絶したりをくり返ししながら、それまでの同一化とは全く違う、新しい一つの同一性 (identity) に至ることが主題となる。つまり、主体的な模索が重要となるのである。加えて、Erikson (1959) は、ア

アイデンティティの形成は生涯にわたると述べている。つまり、青年期のそれは人生で最初期に行われる探索であり、再吟味される可能性のある暫定的なものである。これらを具体的に検討したものに岡本(2002など)の研究があげられる。

アイデンティティ感覚は、斉一性 (sameness) と連続性 (continuity) の感覚に分けられる。斉一性とは、自分の固有性と独自性に対する確信であり、連続性とは自らの過去と現在、未来における一貫性への確信のようなものである。日常的な言葉になおせば、斉一性は、「自分は他の誰でもない、たった一人の私である」という感覚であり、連続性は「私は昔からずっと私であり続けてきたし、今もこれからもそうである」という感覚であるといえる。

また、Erikson (1959) は、青年期のアイデンティティ感覚において、自分自身の斉一性と時間の流れの中での連続性を直接的に自覚することに加え、自分の斉一性と連続性が他者によって保障されていることが重要であるとした。アイデンティティ感覚とは、「自分の斉一性と連続性が、他人にとっての自分の存在意義と一致しているという自信の積み重ね」(Erikson, 1963) である³⁾。これを日常的な言葉になおせば、「私は独自で固有の私であり、それを他者からも認められ、支えられている」(斉一性) 感覚と、「私は過去を受け入れ、それを土台にこれからもやっていく。他者からも、私の過去や未来の可能性は認められている」(連続性) という感覚を深めていくことが青年期の主題であると言えよう。つまり、アイデンティティとは、私は私であり、故に誰にも認められなくてもよいというような独りよがりの自己満足や自己撞着とは質を異にする。むしろ、社会と調和する方向で成熟するものであるといえる。また当然、自らも他者の斉一性と連続性を認め受け入れることを要請される。過去においてもこれからも、私は私として尊重されるべきものであり、また、他者もそうなのである。「私」とは誰とも違う固有の一人 (only one) であり、かつ、皆がそうであるという意味で、大勢の中の一人 (one of them) でもある。そこでは自己と他者、互いの個別性を認め合う寛容さが重要な意味をもつと考えられる。

また、Erikson (1959) は、青年期における危機

状態を「拡散 (diffusion)」と呼んだ。若者では多くの場合、職業的アイデンティティが決められないことにより混乱が生じる。そのような人たちが拡散感覚への防衛として徒党や英雄に過剰な同一化をし、しばしば排他性や不寛容さを増すことを指摘している。つまり、青年においては主に、「職業」によって自己が他人に認められているという自信がもたらされ、アイデンティティ感覚が育つのである。青年にとっての「職業的役割」獲得の心理的意味と重要性はこのように説明できる。ここでは、青年の成熟における社会との接点の重要性が指摘されている。職業的役割の獲得それだけでは成熟とは言えないが、青年の心理的成熟にとっては重要な意味をもつといえよう。

7. 青年期の本質としてのモラトリアム

以上に示したように、Erikson における青年期の主題は、アイデンティティの探求が行われることである。ここで重要なことは、Erikson が、青年を「アイデンティティを達成した存在」ではなく、あくまで「アイデンティティを人生で最初に探求する時期にある存在」という文脈で捉えていたことである。それは先に述べたように、青年期がそもそも子どもから大人へ向けての過渡期を示すものであり、移行プロセスそのものを指すということと一致している。

同様の意味で、Erikson (1963) は、青年の心は本質的にモラトリアムの心理であると述べている。Erikson (1959) によると、社会は青年に、ある程度制度化された「心理・社会的モラトリアム」を提供する。その中で青年は様々な選択や決心を行っていく。具体的にはまずは学校に行き、仕事の場では基礎を学ぶ。同年代の若者たちと競争しながら、自由な「役割実験」を行い、社会のある特定の場所に適所を見つけようとする。この「適所」を見つけることが、自分の斉一性と連続性は社会的に認められているという確かな感覚を得ることにつながる。これがモラトリアムの本来的な意味である。この場合の役割実験とは、具体的にはインターンシップやアルバイト、実習やボランティア、ある種のアマチュア活動 (たとえば芸術活動などにおいて) の営みに見出すことができる。もちろん、ただ行うことで役

割実験として機能するのではなく、そこには相応の、自立に向けた切迫感や半人前意識、緊張感が必要となる。つまり、それらを活用して主体的な模索が行われるかどうか鍵になる。

これらの切迫感を欠いた、質的に異なるモラトリアムが適応的になりつつあると指摘したのが『モラトリアム人間の時代』（小此木、1978）であった。これが日本において「モラトリアム」という概念を一般的にしたといわれる。日本で心理的モラトリアムと言う場合、「いつまでも大人になりきれない」「いつまでも社会的役割を決めきれない」という未熟さを指摘する形で使われることが多い。それはこの小此木（1978）の指摘を部分的に借用したものであると言える。しかし、Erikson は、モラトリアムという概念で、青年が未決状態にとどまりがちで、未熟であるということを描いているのではなく、青年とは本来的に、アイデンティティを（暫定的に）達成するまでの過渡期にあたり、模索や探索にその本質があるということを示唆しているのだと考えられる。小此木（1979）自身もEriksonのそれを「古典的モラトリアム」と呼び、青年の成熟にとっては本来有意義であることを指摘している。

このように、青年期とは、子ども時代のまとめとして、それまでの同一化の段階から脱し、人生で最初にアイデンティティを「模索」する「過渡的な時期」である。青年は子どもと大人の移行段階であり、アイデンティティの探求が、子どもと大人の間で断絶をつなぐものとして機能する。それらの模索が意義あるものとして機能するために、青年期には、切迫感を伴い、主体的な模索を行う「心理・社会的モラトリアム」が与えられる。青年はモラトリアムの期間に積極的な役割実験を行い、自己を社会の中で定位していこうとする。その意味で、青年期の本質は、アイデンティティよりもむしろモラトリアムにあると言える。そして価値観の吟味や社会での自己の定位といった模索は、青年期を過ぎてもなお、折に触れ繰り返される。

8. 現代の青年期と展望

このように、モラトリアムは青年期心性における本質を示しており、それが成熟にとって欠かせないものであるというのが本来の意味であると考えられ

る。それが変質し、切迫感も、社会的出来事への当事者意識をもたず、なかなか生き方を定めないモラトリアムの生き方を指摘した前述の小此木（1979）に対し、村澤（2008）は、現代では「むしろ、若者たちがモラトリアムを享受することができなくなっていることのほうが問題」であると述べている。リスクを避けようとして安心して役割実験ができず、堅実さを求めるあまりリスク回避自体が目的化している。もはや「モラトリアム人間の時代は終わって」と指摘している。

これらは、はじめに述べた現代青年をとりまく状況からも類推されることである。一つの会社に雇われ、そこで生涯勤めあげる、あるいは結婚を機に仕事を辞めて専業主婦になるといったロールモデルは、すでに過去のものとなった。モデル不在の世の中にあって、かつてはモラトリアムの代表であった大学時代は、長引く就職活動によりほとんどそのモラトリアムとしての機能を失いかけている。しかし、この状況を、不況の弊害やリスクの増加としてのみ捉えるのは、一面的である。どのような人生を歩むか、あるいは何を人生に求めるかという生き方や価値観は確かに多様化しているが、多様化自体が悪とは言えない。それは可能性の広がりとしても捉えることができるからである。しかし、多様化を可能性として捉えるか、リスクとして捉えるかは、心の持ちようといった単純な問題にはおさまらない。一見どのような人生も選択可能に見えて、様々な制限から実はあまり選ぶ余地がないということも実際には起こりうる。また、一度の失敗が取り返しのつかない事態を起こすこともある（たとえば新卒時に就職できないことは、日本においてはいまだに由々しき事態を招く）。そういった事態が強調されるとき、リスクへの不安は前景化し、堅実さへの欲求が高まるのは自然な流れであると考えられる。つまり、多様化がリスクとして青年自身に実感されるときに、堅実さや資格志向といった、極端に冒険しない「モラトリアムを体験できない」青年が生まれる。そこに小手先のスキルはあっても、真の人間の成熟は生まれにくいとは言えないだろうか。なぜならそこには、主体的な探求、コミットメントがないからである。

その一方で、インターネットに多様な価値観と情

報が瞬時に発信される今日では、その玉石混交かつ無限の情報を、みずから吟味し取舍選択する力がますます重要になっている。また、これまでは、ある程度価値を共有できる共同体が、(本当に共有できていたのかはともかくとして) 気づけば至る所にあった。しかし今は、価値が共有できる共同体は、自ら作り上げなければならない時代に来ているとも言える(たとえばSNSがその役割の一端を担っている)。情報を吟味し、選び取り、自ら発信し、価値観を同じくする共同体も自らの力で作る。青年期を適応という側面から見れば、極端な場合、もはや既存の社会やモデルに適応できるか、それとも外れるかということが問題なのではない。自らのキャリアは、自らデザインし、場合によっては、それを可能にする共同体すらも自分で作ることが求められているのである。そこに必要な力や、模索や探索に伴う苦しみは、30年前の比ではないのではないだろうか。その模索の失敗は、「やりたいことが見つからない」自分は「もはやどう生きていけばよいのかもわからない」、もしくは「生きる価値すら見いだせない」というような形で現れる。拡散というにはあまりにも深刻な自己卑下につながりかねないようにも思われる。

堅実さの価値がこれほど重視されるのは、多様化あるいはリスク社会のなかで、これまでのモデルに頼ってわかりやすい「成功」をおさめようとする動きとして理解できる。堅実さを求める背後には不確実さへの不安がある。つまり、一種の早期完了であり、成功モデルへの同一化による防衛である。仮に同一化がその時に成功したとしても、その後、モデルがモデルとしての機能を失うことは大いにありうる。例えば失業、離婚、子育ての困難さなどである。そのとき、心理的に危機的な状況が起こって防衛が崩れ、一層深刻な問題が露呈することも想像に難くない。

そもそも、青年期がモラトリアムとして真に機能するためには、未確定や不確実の状態に耐え、早く結論をつかみ取ろうとせずその状態に居続ける、いわば negative capability が必要である。また、役割実験を行うためには、最低限の経済的余裕と心理的な安全感が保障されなければならない。つまり、多様化の可能性としての側面が確実にとらえられ、

青年期がモラトリアムになるか否かは、個人の力に加え、リソース(例えば親の理解や経済力)にますます左右される。ここに極端な格差があると、青年期の体験にも大きな格差が生まれると考えられる。心理的な問題で言えば、特に、親を含めた環境(社会)自体に、negative capability が確保されることは重要ではないだろうか。つまり、青年を取り巻く周囲にも、多様性を認め不確実さと未決状態に耐え、青年の模索を支える寛容さが必要となると考えられる。それは、青年の未熟さをそのまま見過ごすべきであるということではない。寛容さと将来成熟する力への信頼が土台にあれば、批判や指摘は時に青年を奮起させ、切迫感を喚起し、その時代をモラトリアムとして機能させるための壁として機能するだろう。それを突破して新たな地平を開くのが青年の営みの本質であり、そのようにしてつかみとるのは、一方的に与えられるものよりも大きな意味をもたらすのではないだろうか。

また、しばしば誤解されるが、そもそも Erikson のいうアイデンティティとは、先に見てきたように、人間の人生を一つの枠にはめることを強要するような概念ではない。頑なに固定化した自己概念や、自己理想との表面的な一致を示しているのではない。青年期のアイデンティティは暫定的なものであると前述したが、多様化する価値観の中で生き続けるには、むしろ、青年期を過ぎた段階でも、常に自身を吟味し探索を続ける姿勢が、求められるようになるかもしれない。そして、その責任を自ら引き受けることが必要となってくると思われる。現代の成熟は完成型としていつかそこに示されるようなものではなく、常に自分のこととして模索し続けるその態度にこそ見いだせるものなのかもしれない。そして、そのためには、自分自身の固有性を認めると同時に、その可変性を維持し、常に自身を相対化することが求められる。また、他者との関係性においても、多様性を認める柔軟さや寛容さが重要となるのではないだろうか。青年期のアイデンティティ探索は、継続した探索を可能にするための最初の一步であり、青年期のアイデンティティ感覚は、その後の柔軟な探索と変化を可能にするための、中核や軸のようなものとして捉えられる。なぜなら、中核がなければ、その後、新たに見出された価値観が自分に

とってどのようなものなのかを建設的に検討することは困難だからである。無批判に受け入れるか、最初から全てを拒絶するかのどちらかになってしまうだろう。

以上の議論は、社会のありようといった大きな問題だけにとどまらない。これらのことから、特に青年期の心理臨床におけるセラピスト側の、クライアントのもつ成長の可能性への信頼、時期を待つために必要な negative capability、そして模索の価値を重んじ、支える場として機能するという基本的な態度の重要性が示唆される。当然ながら、心理臨床の営みも社会の中に埋め込まれているため、求められるものの変化、とりわけ効率化の要請にどう向きあうかということとは大きな問題になりうる。しかし、クライアントの模索と成長を支える態度は、そもそも青年期に限らない心理臨床の基本的態度でもあると思われる。価値観が多様化した社会は確かにモデルを不在にし、生きづらさを生む。その影響を最も受けやすいのは、子どもを含めた若い世代であり、今まさに社会に出ようとしている青年である。しかし、さきほども述べたように価値の多様な世界では、主体的な選択と模索、社会と自らの関係を根本から問い直すことが、より重要になってくるはずである。その意味では、心理臨床の仕事は、本質が問われているのかもしれないのである。心理臨床の仕事は、社会の既存の仕組みやルールを前提とした適応一辺倒の志向性を支持することや、その目標に向けたスキルアップを促すことだけではない。スピードや効率、合理性と言った現代を席卷する市場主義的価値観や、その反動、防衛としての極端な堅実志向のはざままで身動きが取れなくなってしまったとき、この世に一つくらい、モラトリアムや模索の積極的価値を認める場所があっても良いのではないだろうか。成熟の表面的な、あるいは部分的な側面だけにとらわれずに、個人のペースと主体性が認められ、その選択が支えられ、発展の可能性が信頼される場として機能することは、もはや心理臨床にしかできない仕事になるのかもしれない。

注

- 1) 当時の自民党幹事長武部勤氏は、「2004年12月9日の講演で、フリーターの増加について、「自衛隊に入っ

てサマワみたいなどころに行って、本当に緊張感を持って地元の皆さん方から感謝されて活動してみると、三ヶ月ぐらいで瞬く間に変わるのではないかと思う」と発言した。

- 2) ただし、このように若者を特殊な存在として扱い人間力強化をうたう動きは、大学新卒者の就職率の悪化や派遣切りなどの問題がクローズアップされてからは下火になっている。2012年現在では若年層への就労支援も、世代や性別を越えて悪化している雇用問題の一つとして包含されつつある。
- 3) 一致しているというのは、ある種の妥協や、すり合わせをしながらある程度の一致を認められる状況に至るとのことであると思われる。社会的役割をとることを放棄して、自分の理想にふさわしい場所が与えられるのを一方的に求め続けることが模索であるという意味ではない。

引用文献

- 浅野智彦 (編著) 2006 検証・若者の変貌 失われた10年の後に 勁草書房
- Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162-186.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. International Universities Press. (西平直・中島由恵 (訳) 2011 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and society 2nd Edition*. Norton. (仁科弥生 (訳) 1977 幼児期と社会 みすず書房)
- Freud, S. 1905 Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. *Gesammelte Werke, Intern. Psychoanal. Verlag*, Wien. (懸田克躬・吉村博次 (訳) 1969 性欲論三篇 懸田克躬他 (訳) フロイト著作集 第五巻 人文書院, pp. 7-94.)
- 後藤和智 2006 「言説」—「ニート」論を検証する 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 (編著) 「ニート」って言うな! 光文社新書, pp. 219-303.
- Hollingsworth, L. S. 1928 *The Psychology of adolescent*. Appleton.
- 本田由紀 2006 「現実」—「ニート」論という奇妙な幻影 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 (編著) 「ニート」って言うな! 光文社新書, pp. 15-112.
- 厚生労働省 2008 平成19年度厚生労働白書
- 溝上慎一 2010 現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ— 有斐閣選書

文部科学省 2012 学校基本調査 年次統計 〈<http://www.e-stat.go.jp/SG1/toukeidb/GH07010101Forward.do>
2012年1月20日最終アクセス〉

村澤和多里 2008 若者の自分さがしと職業 都筑学 (編)
働くことの心理学—若者の自分さがしといらだち—
ミネルヴァ書房 pp.79-99.

岡本祐子 (編著) 2002 アイデンティティ生涯発達論の射
程 ミネルヴァ書房

小此木啓吾 1979 モラトリアム人間の時代 中公文庫
若者の人間力を高めるための国民会議 2005 若者の人間
力を高めるための国民宣言 厚生労働省 報道発表資

料 〈<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2005/10/h1004-1.html> 2012年1月20日最終アクセス〉

参考文献

Erikson, E. H. 1968 *Identity-Youth and Crisis*. Norton.
(岩瀬庸理 (訳) 1973 アイデンティティ 青年と危機
金沢文庫)

鐘幹八郎 2002 アイデンティティとライフサイクル論
ナカニシヤ出版

渡部真 (編) 2005 モラトリアム青年肯定論 現代青年の
新たな像を求めて 至文道